

『憧れ』

クラーク記念国際高等学校 二年 菊池 萌珠実

五歳の夏、母に手を引かれ人混みを掻き分けた先に見た光景こそ、今もなお続く、私の憧れの原点であった。

真っ白な塊が何度か無造作に引き伸ばされたかと思うと、次はその動きとは対照的に繊細な動きでその真っ白な塊に和鋏わばさみが走る。

ほんの数分間に、その白い塊は天に羽ばたかばかりのペガサスへと姿を変えた。

その場所は祭の中の一軒の屋台。周囲では色とりどりのテントや煌々と輝く電灯、客を呼び込む活気溢れる声ひしめが轟き合っている中、その屋台は枯葉色のテントに裸の白熱電球をぶら下げひっそりと存在していた。

少し強面の中年男性が、声を発する事もなくただ淡々と手に取った白い塊に色を付け、無造作に引き伸ばし、和鋏を走らせる。その度に私の目の前で白い塊は犬や猫、兎など様々な動物へ姿を変えていった。

周囲の喧騒も夏の暑さも、目の前で繰り広げられる光景の前では全てが無となった。

憧れの語源は「あくがる」だと言うが、正にその時の様子は心が肉体から離れ、浮かれ出るという状態以外の何物でもなかっただろう。

「いつまで見ているの？」と言う母の声と急に強く引かれた手の感触で離れた心が一瞬で戻り、体と結びつけられた。周囲がガヤガヤと騒がしくなり、浴衣の衿が汗でしっとり濡れている事に気づく。

そのまま私は母に手を引かれ、人混みの中へ戻されていく。振り返り後ろを見ながら歩き、薄暗い枯葉色のテントが人混みの中へかき消されて行くのをただ見つめていた。

歩きながら母に「飴細工、そんなに気に入ったの？」と言われ、あれは飴細工と呼ばれる物なんだと、その時知ったのだ。

飴細工を見たのは祭の初日だったのだが、母にねだり、結局私は祭の間の三日間毎日その屋台へと通いつめた。

最終日に私は思い切って、その強面の飴細工職人に「どうすれば飴細工を作る人になれますか？」と聞くと、男性は「修行して、職人になる」と一言だけポツリと答えた。「どこで修行できますか？」と私が続けると、「浅草」と返ってきただけで会話は終わった。

今思えば、それは当たり前前の反応なのだと思う。小さな子供が目の前であの光景を見れば、「自分も作りたい、職人になりたい」という気持ちになるだろうし、私と同じ事を聞いた子供など数えきれない程いただろう。ただ、あの時の私にはその声が冷たく感じ、職人になる事は無理なのだという気持ちを抱いた。

気持ちとは裏腹に、その後も飴細工への興味は薄れることもなく、飴細工の事を調べたり、飴細工が出店される催しがあると聞けば何度も足を運んだ。

そんな中、小学生の時に師匠と出逢った。師匠と言っても私が自分自身で勝手に呼んでいるだけで、現実には師匠から見て私は弟子でも何でも無いのだが、私の中で一番しっくりくる呼び名が師匠しか無かったのだ。

師匠に初めて出逢った日、私は握りしめた小遣いで亀を作ってもらった。目の前で亀が出来上がる。完成かと思ったその時にちょこんと亀の背中に何か乗った。それは可愛らしい子亀だった。思わず「わあー」と声を漏らした私に師匠は満足気な笑顔を浮かべていた。

温かみがあって、思いがけない幸せのおまけまでついてくる師匠の飴細工に私は夢中になった。嬉しくなった私はあの日と同じ質問を師匠にしてみた。すると師匠は「本当に？」と言った後、「もう少し大きくなって本当になりたい気持ちが変わらなかつたら、声をかけて下さい」と返してくれたのだ。子供の夢にきちんとした言葉で返事をくれた師匠に、「ああ、私はこの人の様な職人になりたい」と感じ、その日から師匠は私の中で憧れの人となった。

その後も何度か職人の夢は変わらないと伝えたが、その度にその時の年齢に合わせた返事を師匠は私に与えてくれた。それは現実を考えさせられる内容や夢だけではという厳しさを感じさせる物もあったが、そこも含め包み隠さず話してくれる師匠の姿は、この人の弟子になりたいという私の気持ちをより強くした。

師匠と最後に話したのは中学の卒業の年。気持ちは変わらない事を伝えると、高校で色々な事を体験し、人生の選択肢が増えた時点でも気持ちが変わらなければ連絡を待ってますと……。

あれから二年近くの月日が流れたが、私の師匠への憧れと人生の選択肢の一番は今も変わらない。

あと一年で私の選択肢は増えるだろうか？

先の事はわからない。ただ、師匠への憧れは消える事はないと思う。夢が叶わなければ師匠への憧れは一生届かない永遠の存在として私の心に留まり続け、私が夢に近づけば、師匠の背中を追うと同時に私が一生追い続ける物へときつと姿を変えるだろう。